



平和と和解を築く人 宣教女シスター マリア・トロンカッティ

シート 7

信仰、愛、そして奇跡：

シスター マリア・トロンカッティへの歩み

主はSr.マリア・トロンカッティのうちに驚くべきことを行われました。彼女の宣教女としての生涯そのものが、神の愛の奇跡です。彼女の天国への誕生日である8月にあたり、いくつかの文章を提示いたします。それは、教会がなぜ列聖のために奇跡を求めるのかについての考察、列福と列聖のための奇跡の物語、そして生前に起こった「奇跡」——ある幼い女の子の癒し——の物語です。



神の言葉

イエスは、そのことば、その行い、その寄り添い、そして奇跡をもって、善を行いながら生きられました。盲人バルティマイを癒されたとき、彼は立ち上がり、絶望と苦しみのお金を脱ぎ捨てました。イエスは彼に視力を与えると同時に尊厳をも回復させ、さらに彼が従っていくための勇気、希望、信仰を注がれたのです。同じようにSr.マリア・トロンカッティも奇跡を成し遂げ、仕えていた人々の間に平和と「満ちあふれるいのち」があるようにと、**自らの生涯をささげました。**

「一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒にエリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物ごいが道端に座っていた。ナザレのイエスがおいでになると聞いて、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫びだした。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい」と言われた。そこで、盲人を呼んで、「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」と言った。盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。そこでイエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人はすぐ見えるようになり、イエスに従って道を進んだ。」（マルコによる福音 10:46-52）



Video: <https://youtu.be/dG74OIFheyc>

なぜ教会は列聖のために奇跡を求めるのか？

列聖に至るために、教会は次のように述べています。

「人間による確認には限界があり、その不足を満たすことができるのは神だけである — これが教会の確信である。」

そのため、枢機卿や司教の投票は教皇に委ねられる諮問的な性格を持ち、また人間の判断は「奇跡」という神の認証を必要とするのです。奇跡はまさに、神学的・道徳的に十分に検討された上で表明される「道徳的确实性」の肯定に対し、神ご自身が与えられる保証として求められるものです。



この理由から、聖人の列聖のための手続きにおいては、信仰の証し人（「英雄的徳」を生きた人々）の列福・列聖の際に奇跡が求められ、殉教者の場合も列聖の段階で奇跡が求められます。もし奇跡がなければ、神からの肯定的な応答が欠けることになります。

そうでなければ、特に「英雄的徳」の場合、その手続きは道徳的な優秀さを評価するにとどまり、聖性のイメージが矮小化されてしまう危険があります。

一方で奇跡は、祈願、模倣、取り次ぎの祈りといった信仰の営みを前提とします。それは「聖人」が私たちのために神に取り次ぐことを意味するだけでなく、私たちが聖人を通して他の人々のために祈るという双方向の関わりをも含んでいます。

（出典：ZANET Lodovica Maria, *La santità dimostrabile*, Giammarioli, Frascati 2016, pp.127-128）

奇跡の物語（列聖のために）：フワの治療

「2024 年 11 月 25 日、教皇フランシスコは、福者 Sr.マリア・トロンカッティの取り次ぎによる奇跡について、列聖省（諸聖人の列聖を扱う省）にその法令を公布することを認可されました。

この奇跡は、神への祈願と委ねの力を証しするものです。

2015 年2月2日午前 10 時、エクアドルのヌンクイ・ヌンカ共同体に属するシュアール族のフワ氏（農業と大工を生業とする）が、アマゾンの森の中で機械の刃を研いでいたところ、グラインダーの一部が破損し、大きな石片が右側頭部を直撃しました。その結果、頭蓋骨に深い骨折を負い、脳組織の一部を失いました。

息子と二人の仲間がすぐに救助し、さらにヌンクイ・ヌンカの保健センターの看護助手が対応しました。その助手はタイシャ病院に連絡し、ドクターヘリを派遣するよう要請しました。

フワ氏の状態は極めて深刻でした。ドクターヘリでマカスの病院に搬送され、そこで応急処置を受けた後、アンバト病院へと移されました。病院に到着したのは 17 時 30 分。診断は「脳組織が露出した開放性脳頭部外傷」でした。執刀した脳外科医は、生命の危険が極めて大きいことを伝えました。

手術後、フワ氏は集中治療室に運ばれました。左半身の麻痺と言語の喪失がありました。2月 18 日、退院してマカスに借りた家に移りました。義理の兄弟たちは、手術前からすでに、フワ氏を福者マリア・トロンカッティの取り次ぎに委ねており、また、フワ氏の故郷トゥーティン・エンツァのサレジアン・シスターズの共同体も共に祈っていました。マカスの部屋では、フワ氏のベッドの前に福者の大きな肖像画を置き、彼にマリア・トロンカッティへ委ねるよう励ましました。家族もまた、フワ氏の回復のために Sr.トロンカッティへの祈りを勧められました。なお、リハビリは一切行われませんでした。

2015 年3月末から4月初めの夜のこと、フワ氏は夢の中で Sr.マリア・トロンカッティに出会い、自分が癒されることを保証されました。Sr.マリアは「翌朝には話し、歩けるようになるでしょう」と約束し、首と左脚に軟膏を塗ってマッサージしました。そして、「なぜ話さないのですか？」と尋ね、口元を軽く叩いて「明日には話し、歩けるようになりますよ」と伝えました。

目覚めた瞬間、フワ氏は自分が癒されたという感覚を強く抱きました。そこから徐々に状態が改善していきます。夢の後には予期せぬ変化が起こり、家族や訪問者たちがその劇的な変化を証言しました。まず言葉を取り戻し、その後、体の動きも回復しました。

2015 年 4 月 5 日、義理の兄弟に支えられながら、フワ氏はマカスのプリシマ大聖堂へ参拝しました。執刀した医師は驚き、「私は今、死人が蘇ったのを見ている」と述べました。2017 年に再診した際も、フワ氏は完全に回復していました。



福者マリア・トロンカッティは、神からの取り次ぎによって与えられたこの奇跡を通して、自らの召命——すなわち、シュアール族の人々のために生涯を捧げた「小さなお母さん」、宣教者としての使命を改めて証しされたのです。」

(サレジアン・シスターズの公式サイトより抜粋)

列福のための奇跡: ホセファ・ヨランダ・ソロルサノ夫人の治癒

手続きの完全さのために、列福へと導いた奇跡についても簡単に触れておきましょう。奇跡の受益者はエクアドル人女性、ホセファ・ヨランダ・ソロルサノ・ピスコで、既婚者であり5人の子どもの母親でした。彼女は2002年、最も危険な種類のマラリアの一つである「*Plasmodium falciparum* (熱帯熱マラリア原虫)」に感染し、極めて短期間のうちに不可逆的な退行過程に陥り、その結果、極めて深刻な予後を宣告されました——余命は数日、いや数時間という状態でした。

5人の子どもたちが孤児になってしまうことに特に心を痛めたサレジオ会員エドガル・イヴァン・セガツラ神父が提案したノベナ(9日間の祈り)を通して、神の僕マリア・トロンカッティへの信頼に満ちた共同の祈りが捧げられました。その祈りは驚くべき効果をもたらし、患者は絶望的な状態から予想外の回復を見せ、ついには治癒に至りました。

しばらくして彼女に再会した人々は、死から再び命を得たのだと感嘆をもって語り、それはSr.マリア・トロンカッティの取り次ぎによるものだと言いました。やがて、列聖省(聖人の列聖手続きを管轄する教皇庁の部門)を通じて、この出来事は「多臓器不全を伴う重篤な *Plasmodium falciparum* マラリアからの説明不可能な治癒」として奇跡認定されました。



『Sr. マリア・トロンカッティの伝記』から

奇跡は、すでにマリア・トロンカッティ修道女の生前にも起こっていた
そのひとつをここに紹介します。

生か死か —「手術室」で

その日、小さな村に定住しているわずかな人々に加えて、多くの者が森からやってきていた。およそ80人。笑みを浮かべることもなく、決意を込めて。彼らは武装していた——矢、ナイフ、吹き矢、そして「洗練された文明」のしるしとして)ライフルやカービン銃まで。彼らが求めていたのは奇跡だった。それに従わなければ、即座の処刑が待っていたのである。彼らの首長の名はフアंकであった。

数日前、部族同士の激しい戦闘があり、一人の少女が銃弾を受けていた。宣教所には、体内の破壊的な弾丸を取り出すために必要な手術に踏み出す勇氣のある者は誰もいなかった。そのため化膿が始まってしまったのである。宣教所の人々は「お母さん」的存在であるシスター マリアの技術に望みを託していたが、他の人々はむしろ挑戦のために彼女を待っていた。

首長フアंकはシスター マリアに言った。

「お前、治す…お前、弾丸取る…。もし治さないなら、マカスへは行かせない。もし助けないなら、皆殺しにする…」。

マリアは本当に死刑宣告を受けているように感じた。彼女は、その言葉が単なる脅しではなく、「火の試練」、いわば「神の裁き」であることを理解したのである。

「もし彼女を治すなら、お前を愛する。もし死んだら、お前を殺す」。

— その仕草は、この運命(愛か死か)が彼女の仲間全員にも及ぶことを示していた。



10人ほどの戦士が小屋の中に入り、背を壁に預け、目をシスター マリアにじっと注いで立った。

フアंकの合図で、母親に伴われた負傷した少女が入ってきた。彼女はテーブルの上に横たえられた。シスター マリアは震えが止まらず、視線を落としたままだった。コミン司教が励ました。「勇気を出しなさい、シスター マリア！進まねばならない」。

シスター・マリアは沸騰した湯、清潔な布を求め、ポケットにいつも入れていた折りたたみナイフを取り出した。幸運にも石けんがあり、肘まで丁寧に洗い、布で体を覆った。少女は13歳、激しい高熱に苦しんでいた。

シスター マリアがナイフを沸騰した湯に浸す間、宣教師とシスターたちは祈りのため退いた。少女にはすでに呪術師が手を加えており、むしろその「薬草」のせいで感染が悪化していたかもしれない。

少女の腕の腫れはひどく、生命を脅かす状態だった。シスター マリアはヨードで消毒した。戦士たちは互いに目を見交わし、「なぜ黒く塗っているのだ？」と訝しんだ。その時、彼女は深い祈りを込めて主に呼びかけ、もはや震えることのない手で切開を行った。

膿とともに、まるで新たな銃声のように、弾丸が飛び出し、床に落ちて「カチン」と音を立てた。

父親は勝ち誇ってそれを拾い上げ、仲間とともに即興の踊りを始めた。それはすべてを物語るもの、すなわち和解と友情のしるしであった。シスター マリアは消毒し、包帯をしながら、全く泣き言ひとつ言わなかった少女に優しく微笑みかけた。

小屋の外で葉を敷いて寝床を用意していたシスターたちは、戦士たちが退いていくのを見た。首長はこう言った。「今度は俺たちが助ける。みんな通してやる…」。

その夜は徹夜の看護だった。シスター マリアは手術を受け、なお高熱に苦しむ少女のそばに寄り添い、寝床に横になっては立ち上がり、看病を続けた。

祈りながら、彼女は聞いていた。森の奥では「タムタム」——シュアール族の言葉で「トウントウイ」と呼ばれる大きな木製の太鼓——が鳴り響いていた。強弱や間隔をつけた打撃が、祭りや儀式を示し、また遠くまでメッセージを伝える。シスター マリアには意味は分からなかったが、その夜のメッセージはおおよそこう告げていた。

「これまでのどんな呪術師をも超える癒し手が来た。彼女には永遠に自由な通行を許そう。彼女と共に歩む者にも」。

シスター・マリアは、たびたび家族に宛てた手紙にこう書いている。

「一人の少女が銃弾を受け、コルベリーニ神父が私を「医者」だと言ったので、彼らは私に弾丸を取り出してほしいと頼みました。想像できますか？必要なものもなく、ただポケットにあった小さなナイフだけで…。聖母が助けてくださいました。私は奇跡を見ました。心臓の近くにあった弾丸を取り出すことができたのです…」。

(マリア・コッリーノ著『差し出された「はい」の恵み』エッレディチ社、2012年、113-116頁)



振り返りのために

1. Sr.マリア・トロンカッティは、宣教生活の中で神と隣人に対して全面的な献身を生きました。私たちは、家庭、仕事、共同体の中でどのようにキリストの証人となり、神の愛を伝えることができているでしょうか。
2. Sr.マリア・トロンカッティは、死後だけに奇跡を行ったのではありません。彼女の生涯全体にすでに多くの特別な恵みが散りばめられています。あなたも、自分の人生の中で神の恵みと愛の多くのしるしを見ることができると信じられますか。
3. あなたは聖人たちの力強い取り次ぎを信じていますか。また、特別な信心を寄せる聖人や聖女の取り次ぎによって、恵みや奇跡を受けたことがありますか。



祈りのために（８・２５）

マリア・トロンカッティ修道女の生涯は、神といのちへの愛の賛歌でした。彼女は平和のために自らの命を捧げた。私たちも共に、世界の平和を願いましょう。

神よ、

あなたは、Sr.マリア・トロンカッティの心に、

すべての人のために惜しみなく尽くす愛の行いを宿らせてくださいました。

どうか彼女の取り次ぎによって私たちが願う恵みをお与えください。

そして、私たちが彼女の信仰と、あなたと隣人への熱い愛を

模倣することができるようにしてください。

主 キリストのみ名によって、アーメン。